



活動を始める一歩を応援「コトハジメ」

学びや遊びを通じて、 子どもたちの可能性を広げよう

ともしび

NPO法人燈の会は、心身の障がいや発達に特徴のある小学生から高校生のための放課後等デイサービスぷらうを、青葉区桜ヶ丘で運営しています。現在、大学生、短大生、専門学校生のボランティアを募集中。活動内容は、学習支援、子どもの話し相手、イベントや体験活動のサポートなどです。

ぷらうは、一人ひとりの人格と特性を尊重しながら、子どもたちが将来、就労などで社会に出ていくことを見据えたプログラムを行っています。社会のルールや円滑なコミュニケーションを身につけるための学びは、多様な大人との関わりで育まれます。子どもたちの可能性を伸ばす活動に参加してみませんか。

放課後等デイサービスぷらう

TEL 022-725-5169(平日9:30～17:30)

E-mail 2021.plow@gmail.com



▲HP



活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

パーパスモデル 人を巻き込む共創のつくりかた

個人や一つの組織では複雑化する社会課題の解決が難しく、様々な立場の人との連携や協働の機会が増えています。その際に、「目的がうまく共有されない」、「各自の役割が曖昧になる」ことはありませんか。事業の共通目的を中心に置き、関係者の役割を俯瞰した「パーパスモデル」というツールを使うことで、関係性を可視化できます。本書では、パーパスモデルの使い方の説明の他、実際に用いた場合の事例も紹介され、多様な主体と連携する際の一助となる一冊です。

著者 吉備友理恵、近藤哲朗

発行所 株式会社学芸出版社



つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。
「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 9月10日(水)、24日(水)

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00

日曜日・祝日 9:00-18:00

休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日) 年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3

TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042

[ホームページ] <https://sapo-sen.jp>[サポセンブログ@仙台] <https://blog.canpan.info/fukkou/>

「ぱれっと」バックナンバーは
ホームページからダウンロードできます。



ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行

仙台市市民活動サポートセンター

(指定管理者：特定非営利活動法人

せんだいみやぎNPOセンター)

発行日 2025年9月1日

デザイン PEACE Inc.

[X(エックス)]

@SCSC4CA

[YouTube]

サポセンちゃんねる



はねっと 9

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

特集

秋保の農と食と人が支える、
命と健康

一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

あの頃の私と、誰かのために

humming はみんぐ 子どもとおとなのいばしょ 代表

あべ ふみこ
阿部 史子さん(48)

「子育て中の親と子のための居場所をつくろう」と、阿部さんは2025年3月から月1回程度、仙台市内の公共施設などを会場に子育てサロンを始めました。サロンには、小学1年生になる長女の幼稚園からの友達や、現在の小学校の友達、その親たちが集まります。これまでサロンのイベントとして開催した内容は、おもちゃ・洋服の物々交換会や、ボードゲーム、工作など様々です。イベント企画も広報も未経験でしたが、今では自分も楽しむ余裕が出てきました。企画の頼もしいパートナーである長女は、自身もはまっているキッズネイルを訪れた友達に施しています。「嬉しそうに遊ぶ子どもたちを見ると、親たちもホッとするんです」と阿部さん。居心地の良いコミュニティの選択肢が増えることは、親にとっても子にとっても、広い視野を持つことや安心につながると感じています。

長女が1歳の頃、阿部さんは両親を立て続けに亡くし、仕事と育児の負担も重くのしかかっていました。毎日のちょっとした悩みや、相談するほどでもない愚痴は、忙しさから飲み込んでばかり。今となってみれば、母親同士の雑談から情報交換ができていたら安心できたと思うことも、自分の頭だけで考え込んでいました。また当時は、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、保育園ですれ違う親と気軽に会話ができませんでした。「他のママたちも、きっと孤独だったんじゃないかな」。人とのつながりを求めている日々が、活動へ向かう気持ちをかき立てました。



回を重ねるたび、初対面の人が訪れたり、手伝いを名乗り出る人が現れたり活動が広がっています。「ゆくゆくは老若男女問わず、多様な人にとっての居場所をつくりたい」。そっと意気込む阿部さんです。

humming はみんぐ 子どもとおとなのいばしょ

鼻唄を歌いたくなるほどごきげんで、リラックスできる親子の居場所をつくりたいと名付けました。

毎月第4もしくは第5土曜日の10時～15時に開いている子育てサロンです。



▲Instagram



特集

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

秋保の農と食と人が支える、命と健康

仙台市中心部から車で約30分。「仙台の奥座敷」と称され、温泉地として知られる太白区秋保地区は、川や山などの自然に囲まれ農業も盛んなエリアです。2024年10月から、NPO法人フードバンク仙台（以下、フードバンク仙台）が、観光農業施設「秋保ヴィレッジ」を運営する地元企業と、その契約農家との連携により始めた、食料回収の取り組みをご紹介します。

NPO法人
フードバンク仙台

貧困の根本解決を目指し、企業・個人などからの寄贈を受け、ひとり親世帯、高齢者、外国人労働者など生活に困窮する人たちへの食品提供をしています。また、生活再建に向けた伴走支援も行っています。



ごうはら
郷原 あゆか さん



なくら農園

宮城県村田町で環境再生型農業に取り組んでいます。農薬や化学肥料を使わず露地で雑草と共生しながら、果菜類や根菜類を中心に年間約40品目の野菜を栽培しています。



なくら ひろし
奈倉 弘 さん



お茶の井ヶ田株式会社

1920年製茶業として仙台で創業。2014年に開設した「秋保ヴィレッジ」で、地元の農産物の販売、農業体験の機会づくりなどを通じ、秋保地区の活性化と農業の付加価値創出に取り組んでいます。



店舗開発部 課長代理
秋保ブロック ブロック長
いしがき なおや
石垣 直哉 さん



秋保ヴィレッジにある農産物直売所「アグリエの森」には、秋保を中心に宮城県各地の契約農家による新鮮な青果が並びます。毎週月曜日、郷原さんらフードバンク仙台のメンバーは、搬入口に立ち、青果を納品する農家に困窮世帯の現状を伝え、農産物の寄付を呼び掛けています。積極的に協力している契約農家の一人、奈倉さんは「土に還すしかなかった規格外の野菜で、誰かの役に立てるなら」と、笑みをこぼします。寄付された農産物は、市内で生活に困窮する人たちに届けられます。連携のきっかけは、フードバンク仙台が農家とのつながりを求め、お茶の井ヶ田株式会社（以下、お茶の井ヶ田）に協力を依頼したことから。石垣さんは「“楽しい団欒を創造する”という弊社理念のもと、食を通じて地域に何かできるなら」と、快諾の理由を話します。

1
ねらい生活困窮者の
健康を支えたい

フードバンク仙台が農家とのつながりを求めたのには、2つの理由がありました。食料寄付は増加傾向にあったものの、物価高騰の影響で生活困窮者からの支援依頼がそれを上回る状況にあったこと。また、安さを理由にインスタント食品や菓子パンなどに日々の食事が偏ることです。郷原さんは、「食の課題は、栄養失調や様々な体調不良の原因にもなり、就労など自立に向けた活動の障壁になることもあります」と、危機感を抱きます。シングルマザーに野菜を届けると、「数カ月ぶりに野菜を食べた」と喜ばれることも。さらに、「日本で働く外国人への支援も増えています。食文化や宗教の違いなどで、インスタントや加工食品の中には食べられない物も多く、生鮮品は自分で調理ができるので重宝される」と郷原さん。農家との連携による、支援の質向上を実感しています。

お茶の井ヶ田さんが関係を築いてきた約270名の契約農家の方々を私たちにつないでくれたから実現できた



新しいことをするのはなく、これまでの生業の延長線上でそれぞれが力を出し合えたことが継続のコツです。

2
ポイントそれぞれの
ニーズが一致した

農家が、規格外の野菜を販売しようとした場合、従来の包装材には入らなかったり、新たな価格基準を設けなくてはならなかったりと、多くのコストがかかります。「味は良いしもったいないけど手間はかけられない。でも、まとめてそのまま持ってくれば、郷原さんたちが必要な人に届けてくれるから助かる」と奈倉さん。一方、石垣さんは「この施設の役割は、人々が集まり交流するための中心的な場であること、有事の際の食糧供給基地として機能することです。開業当初から、地域のハブとして貢献したいと考えていた」と、話します。秋保ヴィレッジ開業から11年、今回の協働もその役割を果たす行動のひとつです。

3
これから

お互いを活かす存在に

「農家の高齢化は顕著で、地元では毎年耕作放棄地が増えている」と奈倉さん。売りに出せない野菜を選別して採るのも、繁忙期は手が回らないことから、必要とする人たちが直接畑に来て、自分で野菜を収穫してもらうことも考えています。奈倉さんは、「これからの農業のためにも、子どもをはじめ多くの人に農作業を体験してもらって、関心を持ってほしい」と、熱い思いを抱いています。一方で、生活保護を受給する人の中には、働くことができずに一日中家にいて孤立する人が多いこと、レジャー目的で外出することが少なく体験格差が生じやすいことなどを課題に感じていた郷原さん。奈倉さんの提案に目を輝かせます。石垣さんも「面白そうです。地域にあってよかったと思ってもらえる企業であり続けるためにも、この連携が、秋保の活性化につながると嬉しい」と、今後に期待を膨らませます。

▲なくら農園

NPO 法人
フードバンク仙台

▲HP

